

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 円山 拓子

円山拓子氏の博士論文「韓国語助動詞 *cita* の多義性 ―用法間の相互関係と意味拡張―」の審査結果について報告する。

本論文は韓国語の助動詞 *cita* を取り上げ、*cita* の持つ多義性について文法と意味の両側面から考察を行うとともに、多義性を支えるメカニズムを明らかにしようとしたものである。従来の研究では、*cita* の用法についての統一的な見解は得られておらず、その多義性に関しても本格的な考察はほとんどなされていない。本論文は、*cita* の用法を詳細に分析した上で、各用法と文法的特徴との結びつき、各用法の相互関係、意味拡張の経路について考察することにより、*cita* の多義性の全体像を把握しようとする。

本論文は7章からなる。まず1章では論文の目的を述べるとともに、*cita* をめぐる4つの問題を提起している。さらに、*cita* に関する先行研究の検討し、提起した4つの問題についていずれも十分な解決がなされておらず、*cita* の全体像の把握には文法的側面と意味的側面の双方からの分析が必要であることを示した。

2章では、問題提起①「*cita* にはどのような用法があるのか？」について考察している。先行研究の掲げる用法を整理・検討することを通じて、*cita* にどのような用法を設定するのが妥当かを論じた。分析の結果、先行研究で指摘されている状態変化・受身・自発・可能の4つの用法のほか、「動作主を概念化の枠組みからはずして、事態の終結局面を重点的に表す」という意味的な特徴を持つ用例が見られることを指摘し、これを新たに「事態実現用法」とした。

3章では問題提起②「*cita* の用法はどのような文法的特徴と結びついているか？」、つまり、*cita* の各用法が語彙レベル・構文レベル・語用論レベルにおいてどのような特徴を持つのかを分析している。具体的には、先行用言の品詞、語彙アスペクト、構文的な特徴、名詞句の属性、話者の予想との一致／不一致という5つの項目について分析を行った。その結果、用法内で共通していてバリエーションに制限がある項目、本論文で述べるところの「不可欠な文法的特徴」が明らかになった。そして、これら不可欠な文法的特徴は用法ごとに異なっており、用法の区別には従来言われていた単一の条件（先行用言の品詞など）ではなく、語彙レベル・構文レベル・語用論レベルそれぞれに属する複数の文法的特徴が関与していることを指摘した。

4章では問題提起③「*cita* の用法間の相互関係はどのように位置づけられるか？」について、3章で得られた各用法の文法的特徴を用いて、用法間の親疎関係を考察している。ここでは、作業仮説としてレイヤーモデルという図式を提案し、このレイヤーモデルを用いることによって、*cita* の用法の解釈が決定していくプロセスが把握できること、さらに、2つの用法にまたがる例が生まれる理由について説明できることを示した。また、レイヤーモデルからは「他動性×名詞句階層」「他動詞×文法的レベル」という2つの概念を平面軸とした2種類の意味地図を導き出すことができること、これにより、*cita* の用法間の相互関係を図表上の位置関係に置き換えて把握できることを示した。

5章では、問題提起④の「*cita* はどのような意味拡張の経路を経て多義語になったのか？」

について、通時的な研究を踏まえつつ、意味的な側面から考察している。cita のプロトタイプの意味は、本動詞の「落ちる」という下方向への空間移動であり、cita の多義全体に共通する抽象度の高いスキーマの意味は「人・モノが背景的な力によって変化し、ある到達点に至る」と考えることにより、助動詞の多様な意味にたどりつくまでの意味拡張の経路を明示的に示している。本論文の特色は、本動詞から直接、助動詞が派生したと考えるのではなく、本動詞と助動詞の間に<動詞+cita>型の複合動詞が介在すると考える点にある。これによって、<用言の連用形+助動詞 cita>という構文の出現を矛盾なく説明できることを示した。

6章においては、5章までの議論にもとづき、メタファーと文法化、ヴォイスの体系の中での位置づけという3つの観点から、cita の意味的特徴と文法的特徴が言語学的にどのように位置づけられるのかを検討している。メタファーに関しては、方向に関するメタファー、空間的概念から時間的概念へのメタファー的写像、広義のメトニミーという3つの点から検討し、時間的概念へのメタファー的写像においては、時間的概念からさらに意味拡張していく段階で参与者の性質等も大きく関与すること、などを指摘した。文法化に関しては、cita の意味拡張の経路を一方向性仮説と照らし合わせ、一般化と意味の漂白化、脱範疇化という3つの点で、本論文の主張する意味拡張の経路が文法化の順序としても十分に妥当性があることを述べている。ヴォイスの体系の中での cita の位置づけに関しては、「出来文」「BECOME 型受動」「構文ネットワークの広がり」という3つの点から論じ、日本語学で論じられている「出来文」「出来スキーマ」は、cita の用法のうち、特に事態実現用法と共通点があることを指摘し、これは日本語と韓国語の事態の捉え方の類似点を示唆するものであることなどを述べた。以上の議論を通じて、cita は1つの形態でアスペクト・ヴォイス・モダリティにまたがる意味を表しており、この3つの文法カテゴリーの連続性を示すところに cita の独自性・特殊性があることを明らかにした。

7章では、論文全体の議論を整理してまとめるとともに、スキーマの意味と文法的特徴の相互作用によって、cita の多義性が成り立っていること、意味的側面と文法的側面が互いに異なる方向から cita の多義性を支えていることを指摘した。

本論文は、韓国語の助動詞 cita の用法を詳細に分析し、その多義性の全体像を文法と意味の両面から明らかにしている。さらに、レイヤーモデルを使うことにより、用法相互の関係を明確にし、スキーマの意味を考えることにより、意味拡張の経路を示すことができた。特に、各用法と語彙レベル・構文レベル・語用論レベルの文法的特徴との関係を明確にし、事態実現用法を設定する必要性を示したことは、従来の研究を大きく進展させるものである。また、各用法間の関係と意味拡張の経路を示す試みも、従来の研究にはない独創的な成果と言えよう。このような点において、本論文は、韓国語学、言語学の分野において高く評価される論文だと考える。なお、レイヤーモデルに関してはさらに検討が必要な部分があること、複合動詞に関する通時的な分析が不足していることなど、今後検討すべき課題も指摘されたが、それらが本論文の価値を損ねるほどのものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。